稲作

病害虫防除について

―いもち病防除―

オリゼメート粒剤は初期の発病を抑えることで、その後の葉いもちや穂いもちの伝染源を減少させます。箱粒剤や側条施用剤を使用しなかった場合は、6月中旬ごろに10a当たり3kgを散布して下さい。散布の際には湛水状態で行い、散布後4～5日間は入水せず、7日間は落水や掛け流しは避けて下さい。

―斑点米カメムシ類防除―

斑点米を発生させる主要種はアカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメです。斑点米カメムシ類はイネ科雑草等で繁殖しますので、密度を抑制するため、出穂前までに畦畔や農道、休耕田等で餌となる穂を付けさせない雑草管理が重要です。また、圃場内にイネ科やカヤツリグサ科の雑草があると、成虫の侵入を助長するので、圃場内の雑草対策も徹底して下さい。

※草刈り作業は、地域や集落でまとまって、一斉に作業するようにしましょう。

―表層剥離やアオミドロ等防除―

表層はく離やアオミドロ等の発生が多いと、地温や水温が低下し、生育が抑制されます。出来るだけ発生が多くなる前から、気温の低い早朝や雨天時の水の入れ替えを基本とします。水管理の効果が十分でない場合は、モゲトン剤等を散布します。

―ばか苗病対策―

種子伝染性の病害である「ばか苗」病株は、毎年6月下旬頃に圃場で見られるようになります。採取圃場周辺でばか苗病株が発生した場合は、来年度の種子に感染する恐れがありますので、早期に抜き取りしましょう。

中干しで茎の充実を

―目標茎数確保後の中干し処理―

【6月下旬頃の茎数と中干し時期の目安】

㎡当たり茎数	目安 440 本 / ㎡程度 ○21.2 株 / ㎡（坪 70 株）の場合 →平均茎数 21 本 / 株 ○18.2 株 / ㎡（坪 60 株）の場合 →平均茎数 24 本 / 株
中干し開始時期	○440 本 / ㎡以上 →直ちに中干し ○440 本 / ㎡下回る →浅水管理で茎数確保
中干し・溝掘り	○中干し期間 （7～ 10 日程度） ○軽くキレツが入り、足跡がつく程度 ○溝掘りの実施
中干し後の管理	溝掘りを活用した間断かん水の実施

カドミ米発生が懸念される地域では、出穂前後各3週間（平年7月15日～8月25日）の湛水管理を徹底して、カドミの吸収を抑制しましょう。

そのため、中干しと溝掘りを確実に実施し、根の活力を高めるとともに、湛水管理終了後の完全落水を容易にすることが重要です。

営農行事案内

夏ねぎ栽培講習会と生育巡回の実施

主力作物である『白神ねぎ』の、栽培講習会と生育巡回を、6月下旬に開催致します。営農指導員や農業振興普及課、農業技術センター職員を講師に、生育や今後の管理についての講習を行いますので、ぜひご参加ください。なお詳しくは、営農経済課までご連絡ください。

営農トピックス

野呂田久一さんが、1等に当選

JAグループ推奨の一発処理除草剤『エーワン』による、購入者対象のキャンペーンが実施され、浅内の野呂田久一さんが、1等（高級掃除機）に当選しました。野呂田さんは、「農薬や肥料は、いつもJAを利用しているので、そのおかげですね。」と笑顔で話してくれました。